

豊富な資料を用いて多彩に提示される

三位一体論教義の展開と完成

宮本久雄

東京大学名誉教授

問題は、イエス・キリストから始まる。

新約聖書によると、イエス・キリストは聖霊によって聖母マリヤから生まれ、父なる神の子（御言・ロゴス）としてその御旨に従い、すべての人が汚染されている原罪からの解放のため、贖罪として十字架上で命をささげたとされる。

その場合、父なる神と子なるイエスとの関係はどうなのかがまず問題となる。そうしたキリスト教独自の最初の疑問に応えようと思案を重ねた人々がギリシア教父であった。彼らは信仰に厚く、かつギリシア哲学の教養をもかねそなえた最初のキリスト教神学者・知識人であった。

土橋氏によると彼らは、ユダヤ教に対し「父なる神と異なる（子なる神）の実在性を擁護し」、同時に「ギリシア人やエジプト人な

どの多神教徒」に対しては「一なる神」を主張しなければならなかった。この父と子の同一性を、同一本質（ホモウシア）というギリシア哲学の概念を用いて明確に宣言したのがニカイア公会議（三二五年）であった。

次に父から子を通して発出する聖霊の位置づけが問題となった。この聖霊も加え三位一体論が仕上げられていった。

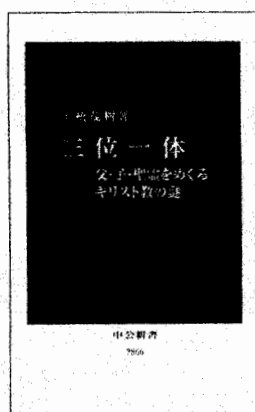
西方ではアウグスティヌスが三位一体論を思索して提示した。彼の三一論は、東方が父→子→聖霊という垂直的方位を示し、父の至高の神秘性を際立たせるのに対し、まず人間の精神の働きに注目し、精神が働く時、言（概念）を生み、その言が再び精神を志向し愛し回帰する構造から、アナログ的に生む父（不出生）と生まれる子（出生）の関係を結ぶ絆、すなわち愛

として聖霊を説明した。そこから父→子→聖霊のいわば円環的關係が強調され、人間論的にわかりやすい三一論となっている。だから父の東方的神秘性が後退している。

土橋氏は以上の三位一体論教義の展開と完成を本書において図版や図表を加えてわかりやすく解説している。その構図は、第一章が三位一体の聖書の起源を、第二章がキリストの神性をめぐるユステイノス、オリゲネスなどの議論の始まりを、第三章がアレイオスの異端とニカイア公会議を、第四章がニュッサのグレゴリオス（四世紀）などによる教義理解の深まりを、第五章が三位一体論教義の完成を、第六章が西方ラテン世界における展開を、終章が一〇五四年の東西教会の大分裂（シスマ）を各々扱っている。

本書が刊行された二〇二五年に、ニカイア公会議一七〇〇周年、日本の東方キリスト教学会の二五周年を迎えることは、不思議な摂理の内にあるといえよう。

（みやもと・ひさお）



『三位一体』

父・子・聖霊をめぐるキリスト教の謎』

土橋茂樹〔著〕

中央公論新社

新書判／1,100円 本体価格